

# 丸本を資料とするアクセント研究の問題点

坂 本 清 恵

(本稿のキーワード 動詞のアクセント・義太夫節のアクセント・近世期アクセント体系変化)

## はじめに

近世初期大阪アクセントの資料として、近松浄瑠璃譜本、いわゆる丸本が有効であることは、すでに述べたところである<sup>1)</sup>。しかし、そこに施された胡麻章や文字譜は、本来、語り方を指示するもので、日本語のアクセントが音の高低変化である旋律と似ていることと、アクセントに忠実に語るといふ義太夫節の作曲理念とがあったために、現在、アクセント資料として活用できる。つまり、アクセントの記述を目的として施された辞書や注釈類の声点とは、本質的に異なるもので、アクセント資料としても、おのずと限界がある。

そこで、本稿では、楽譜として残された丸本を、アクセント資料として扱う際、具体的にはどのような問題があるのか、動詞の終止形・連体形のアクセント推定を通して見直すことにする。



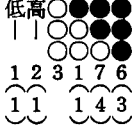
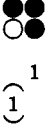

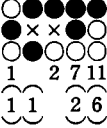
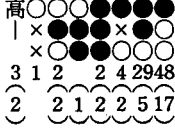
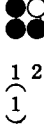
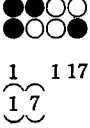



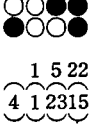

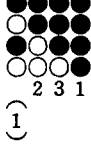
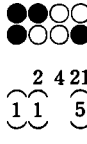
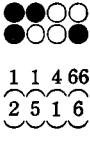

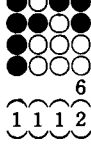

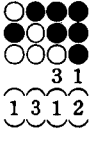
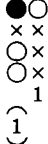
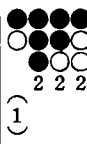
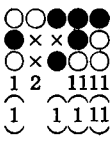
## 一 胡麻施譜状況

近世期の動詞のアクセントは、史的アクセント変化が、活用形により、生じていたり、いなかったりするうえ、同じ活用形内でも、下接する助詞・助動詞によって異なるなど、大変複雑な様相を呈している。語形面でも、二段動詞の一段化、連体形の終止形侵蝕が生じるが、後者はアクセント面にも及ぶ。また、終止形・連体形は、近世初期から現在大阪アクセントに至るまでに、二・三拍第二類動詞の低起式化 $\bigcirc\bigcirc\downarrow\bigcirc\bigcirc\bullet$ と、三拍第二類動詞の $\bigcirc\bigcirc\downarrow\bullet\bullet\bullet$ という大きな形態変化を起している。

これらのアクセント変化の状況を考慮に入れながら、主に近松世話物浄瑠璃二四篇を資料に、終止形・連体形のアクセント型推定を試みることにする。

使用本の詳しくは、坂本清恵編『近松世話物浄瑠璃 胡麻章付譜集 索引 体言篇』(アクセント史資料研究会刊 昭和六二年一月)を、

〔表1〕

特殊形	終止形	連体形			特	終止形	連体形		
 1			一	三				一・二	拍動詞
			二	拍動	●			二	拍動詞
			三	詞類	●●			一	二拍
 1			一	三・四	●○			二	動詞
			二	拍動				一	二・三拍動詞
			三	詞類				二	拍動詞

動詞胡麻施譜例については『同用音篇』（昭和六三年六月）を参照されたい。

アクセント推定に際しての問題は、胡麻章の反映する高低の揺れである。類別の所属が揺れるために、それが胡麻章に反映していることもあろう。しかし、アクセント推定は、胡麻章の帰納だけでは不可能なので、類別の明確な三・四拍動詞までを本稿の対象にする。具体的な語については二で掲出する。

胡麻章から帰納した高低と、語類との関係をまとめると「表1」のようになる。●○は高低を示すもので、胡麻章から推定したアクセント型ではない。

#### 「胡麻章と語類の関係」

1 終止形は、一般形と、「ベン・マジ（マイ）」の付く特殊形（特）とを区別した。「ベカリ」の付く用例はない。

2 義太夫生前と死後との資料に差が認められるものもあるので、上段に「長町女腹切」までの生前の資料の用例数を、下段に死後の資料の用例数を（ ）で示した。

3 音楽的要素が強い胡麻章を含むため、始めの高さしか分らないものについては一括して「低」「高」にした。

4 三拍以上のもので、最初と最後の高さしか分らず、施譜のない部分が高とも低とも考えられる場合、その部分を×で示した。

以下、「表1」に基づき、拍数別語類ごとに終止形・連体形のアクセントを考察する。

## 二 終止形・連体形のアクセント

二段動詞の場合、終止形と連体形の拍数が異なるものもあるので、対象語掲出には連体形を用いる。

### 【二一】一・二拍動詞

（一類）する

（二類）経る・来る・見る・出る

一類終止形は確例がない。連体形は「するぞと」（曾十七オ）「する心」（生七ツ）の二例。連体形は、『御巫』（本日本書紀私記）『散木集注』『古今集』『四座講式』『平家（正節）』等●である。近松後者の例は、「する」の直後で休止するなどの音楽的要請のために、下降する●が現れるのであろう。

二類は終止形一拍的ものに「ふべき」（堀十四オ）がある。「経」の連用形に「へて」（網三九オ）の低起式反映例があり、二類の終止特殊形の例にできる。二拍のものには「出ると」（淀二九ツ）「見る」（念十一ウ）の低起式反映の施譜が行われている。

二類連体形は「くる」（淀三六オ）「見る」（小十七オ）等、低起式反映例が十七例あり、一類と弁別できる。しかし、「見る」（鍵三三オ）等●○を示す例も七例ある。現在大阪アクセントは低起式無核であり、史的アクセントから、○●○○○●○というアクセント変化は想定できない。●○を示す例が義太夫死後の作品の例で、前十七例のうち十五例までが生前の作品の例であることに原因があるように思われる。

## 【二・二】二拍動詞

(一類) 明く・言ふ・入る・売る・置く・押す・貸す・聞く・咲く・知る・添ふ・焚く・散る・突く・継ぐ・積む・問ふ・飛ぶ・泣く・乗る・踏む・振る・行く・寄る・去る

(二類) 合ふ・有る・打つ・切る・食ふ・差す・住む・立つ・照る・解く・取る・為す・なる・飲む・吹く・降る・干す・持つ・病む

一類終止形「おす(押)」「経(經)十オ」「つく(突)とは」「會(會)二五オ」等、●●を示す九例と、「あく(明)」「網(網)三六ウ」「なる(鳴)」「宵(宵)四五ウ」等●●を示す六例。特殊形とされる「いる(入)べき」「念(念)十八オ」「とぶ(飛)まいか」「万(万)一オ」には、●●を示すものはない。

連体形は用例が多く、「いふ(言)も」「淀(淀)三十オ」「いふより」「小(小)二九オ」「聞(聞)より」「長(長)三二オ」「しる(知)まぞ」「鍵(鍵)四八オ」等、●●の語りを指示する施譜三七例。「いふ程」「小(小)二八ウ」「いふを」「宵(宵)十四ウ」「置は」「宵(宵)四六ウ」等●●を指示する施譜二八例。漢字一拍目に上げ胡麻一つが示されている「明こと」「山(山)十八ウ」の例などは、二拍目の高が省略されたもので、実際には●●で語ることもあったかもしれない。しかし、例に掲げたように、本稿では連体形に確実に●●を示す胡麻があることから、この場合も●●として扱った。

一類終止形は、平安・鎌倉、●●のアクセントで、『平家』では、一類動詞高平型の他、下降型の表記も若干認められ、ある意味で連体形に終止形が侵蝕される以前の残存を思わせるという。

しかし、近松丸本の場合、平安・鎌倉から現在京都・大阪まで●●型アクセントの連体形にも●●を示す施譜があるうえに、●●は義太夫死後の作品に偏在している。つまり、新しい作品に●●が多いことになり、終止形の●●のみを古いアクセントの残存と考えることはできない。胡麻施譜法の問題、あるいは語る際の音声変化の現れにその原因を求めるべきである。

二類終止形は「ありとは」「調(調)二一オ」「さす」「油(油)四一オ」「とく(解)な」「薩(薩)三一オ」「ふる(降)」「丹(丹)十五ウ」「あふとか」「紅(紅)二二ウ」等、低起式反映の施譜二六例で、一類との弁別が容易である。助動詞「まい」のつく「立(立)まい」「油(油)二二オ」「とるまい」「薩(薩)三三オ」の二例は特殊形で、高起式アクセントを反映している。

二類連体形も終止形一般と同様の胡麻施譜状態で、「あるなれば」「小(小)十一ウ」等、「打音」「會(會)十九ウ」「きる(切)をと」「紅(紅)二十ウ」等、低起式反映の施譜七七例。高起式反映の施譜が九例あるが、うち七例が義太夫死後の作品の例である。

## 【二・三】三拍動詞

(一類) 明くる・当(當)つる・消(消)ゆる・染(染)むる・寄(寄)する・捨(捨)つる・死ぬる

(二類) 生きる・出(出)づる・受(受)くる・落(落)つる・生(生)ふる・下(下)るる・掛(掛)る・締(締)むる・過(過)ぐる・攻(攻)める・立(立)てる・解(解)くる・閉(閉)づる・投(投)ぐる・晴(晴)るる・寝(寝)める・吠(吠)ゆる・見(見)ゆる・果(果)つる・見(見)する・漏(漏)るる

二段動詞の一段化と連体形の終止形侵蝕が現れる。終止形には古い二拍のものと、新しい連体形からの三拍のものがある。ナ行

変格活用の「死ぬ」は、終止形・連体形とも「しぬる」で現れるため、【二二】には含めず、ここに分類した。

「類終止形と思われるのに「あつるな」(薩五六ウ五)。連体形「きゆる」(生四十ウ)「捨る」(小三十ウ五)があり、高平型を反映する。

『古今集』で「死ぬ」はⅢ型で、終止形●●・連体形●●と推定されているが、近松丸本では、「類に入れられよう。終止形「しぬる」(薩十二オ五)、連体形「しぬる」(紅二四ウ一・今三七ウ六)等で、施譜は●●○を示すが、【二二】の「類同様、●●●アクセントの反映と考えられる。

二類は、平安・鎌倉、終止形○●・連体形○●●で、アクセント体系の変化を経て、近世初期には、それぞれ○●●・●●○に、その後、連体形が終止形を侵し、現在までに●●○→○●●に類推変化をしている。

終止形の例のうち、連体形と同様三拍になっているのは、すべて高起式例のみ。「おつる共」(紅二六ウ二・潤一ウ二)「落ると」(氷十七ウ三)「過ると」(淀三七オ八)、高平型を反映するかのような「おふる」(堀三オ三)「見ゆる」(絵三オ八)は「謡」と「歌」の例である。アクセント史の観点から考えれば、●●○アクセントを持つはずで、高平型の「類」と、容易に弁別されるべきところだが、一類施譜に●●○が現れ、二類も●●○の変容●●○が多<sup>く</sup>、世話物の例からは、明確には区別できない。

古い終止形二拍の施譜例は「もる」(生四五ウ五)一例のみ。近世期○●とあるべきだが、高起式に変化した連体形に侵蝕された

●●○の影響か、あるいは義太夫死後の作品に施された特異例か。連体形は「うくること」(念二ハオ七)「おつる涙」(氷十三ウ五)「かくる仏」(曾三ウ四)「たてる我つま」(潤二一オ四)等●●○を示す施譜二二例。「いきるは」(紅二一オ八)「せめるは」(薩二四ウ四)等●●○を示す施譜は十二例あり、●●○優位だが、●●○と語られる場合もある。語形の新古で語り分けてはいない。

現在までに起った●●○→○●●の形態変化をうかがわせる例には、「出る月」(紅二九オ二・潤四オ二)、「出るのは」(万三十ウ二)がある。前者は「出」を二拍に読むべく、漢字やや下方に上げ胡麻があるので、○●●か○●○を映すものであろう。後者は「でる」の連体形例である可能性も捨てきれない。しかし、「いづる」はすでに「でる」にあって代られた古語であつたろうから、その語が新しいアクセントで語られ始めていたとは考えにくい。むしろ、「でる」○●○というアクセントがあるために、「いづる」は高起式に体系変化するのが遅く、低起式に語られることがあったと考えるべきか。「出る所」(重十九ウ四)の例もあり、二類に入れたが、所属が揺れているのではなからうか。

なお、明治期に刊行されたものだが、義太夫節を語る際の詠りを防ぐために書かれた初雪庵主人「浄瑠璃詠り解」の中に、二・三拍動詞「生きる」を「下上」、「活ける」「いづる」を「上中下」で示した例がある。現行義太夫節では「生きる」は●●○で、現代大阪アクセントではなく、古いアクセントで語られることから<sup>6)</sup>、この記述は、義太夫節からアクセントを帰納したものであるなく、執筆者自身のアクセントを示したものと考えられる。口語で

日常語である「生きる」は形態変化後の○○●で、古語になった「活ける」「いづる」は●○○で著されている。現代京都・大阪では、いずれも低起式無核で、他の二類と同様のアクセントである。明治期には、古語を中心に二・三拍動詞二類の変化前の●○○も聞かれたのではなからうか。これと同様のことが、現代でも京都より古いアクセントを持つ方言にみられ、田辺では、●○○は古い型、○○●は新しい型と意識する、龍神では、新しい語形をオキルと言っても、古い語形をオクルというのは不自然であるという報告がある。<sup>(7)</sup>

さて、「浄瑠璃訛り解」の執筆者であるが、「初雪庵主人」と名乗っているところから、執筆時には恐らく老人であり、言語形成期は江戸末期であろう。大阪出身ではなく、周辺のやや古いアクセントの地域出身のため、古いアクセントが現れたのではないかと、う疑問が残る。しかし、次項で述べる三拍動詞二類は、「折る・痛む」は「上上上」、「急ぐ」は「中上上」と、近世期から現代までに一類に類推変化した●●●と、その変容形○○●を著している。現在の関西系の方言アクセントをみると、二・三拍動詞二類が●○○を残していれば、三拍動詞二類も●○○である(高知アクセントなど)か、二・三拍動詞二類が低起式になっていても、三拍動詞は●○○を保っている(徳島・龍神・田辺)場合がある。<sup>(8)</sup>つまり、三拍動詞二類の一類化は、古いアクセントを持つ方言では現在でも類推変化が完了していない。著者は、三拍二類●●●型アクセントを持つ大阪の人物で、「活ける」「いづる」の●○○は日常使われぬ語に、古いアクセントが残存したものであろう。

## 【二四】三拍動詞

(一類) 当たる・勇む・至る・浮む・歌ふ・語る・変る・通ふ・刻む・括る・殺す・探す・触る・晒す・沈む・違ふ・続く・覗く・上る・運ぶ・塞ぐ・震ふ・結ぶ・喰ふ・貰ふ・渡る・躍る・暮す・忍ぶ

(二類) 歩む・急ぐ・厭ふ・祈る・祝ふ・享す・移る・起る・思ふ・掛かる・叶ふ・砕く・潜る・曇る・狂ふ・溢す・籠る・騒ぐ・凌ぐ・絞る・叩く・頼む・作る・包む・流す・嘆く・悩む・呪む・盗む・残す・残る・走る・果す・浸す・響く・開く・迷ふ・戻る・許す・惜しむ・返す・返る・通る・申す・稼ぐ・口説く・滑る・背く・直す・願ふ・延す・払ふ・漏す・拝む(三類) 隠す・参る・遊ぶ

なお、「示す」類を別項とする必要があるのだから、「しめせば」(油四七ウ)の例のための、考察は控える。

一類終止形には●●●を完全に映す例はなく、「うかむと」(潤二二ウ)「ちがふ」(真二ウ)「ころすな」(念二ハウ)等、●●●を示す施譜が行われている。しかし、時代物には「きくかはる」(佐々木大鑑三六ウ)のように●●●を指示する例もあるもので、ただちに古いアクセント●●●の反映とは考えられないのは、他の一類動詞と同様である。特殊形の例には「かはるまじきと」(念二五ウ)があり、●●●→○○●の発音上の変容が施譜にも及んでいる。

一類連体形は「うたふは」(薩五六ウ)「かはるせまくら」(絵二三ウ)「さはる手もとに」(生四四ウ)等●●●を示す施譜九

例、「あたるも」(今二三オ一)「きざむやいば」(絵十八ウ七)「さ  
がす眼」(縫四九オ六)等●●○を示す施譜十一例で、●●●と●  
●○が並ぶ。また、「うたふを」(油二ウ一)「つづくさと」(淀  
二五ウ四)「おとる」(躍)「どちやう汁」(絵十四オ二)の三例は、低  
く平らな語りを示すが、近世期には、低く平らなアクセントはな  
いので、実際には、平らに語る●●●のアクセントを反映したもの  
である。

二類終止形は「思ふとは」(生十五ウ五)「さはぐな」(綱十三オ一)  
「たのむと」(潤二二三ウ八)「にらむと」(油四二オ五)「はしる」  
(曾一ウ七)等●●○を示すもの十七例、「あゆむと」(長二七  
ウ一)「たゞく」(経十八ウ五)「残る」(念二三ウ五・冥三二ウ一)等  
●●○が九例で、●○○・●●○とが示されている。特殊形を作  
る助動詞が下接する例には、「もらすまい」(念二五オ一)「なげく  
まし」(経四四ウ二)「かなふまい」(経三一ウ四)の高起例と、「く  
るふまひ」(山三四オ四)のように一拍目を下げる施譜がある。二  
類特殊形は、●●●のアクセントであり、発音上の要請から●  
○や●●○に変っているものが施譜上にも現れたのであろう。

連体形は「あゆむひさ」(丹七オ三)「いそぐ程」(丹八ウ五)「お  
こるいさかひ」(山一ウ六)等●●○を示す施譜六五例。「あゆむ  
心」(絵三十オ二)「たのむに」(経三七ウ七)「なげく小はるも」(綱  
十七ウ五)等●●○を示す施譜三四例で、●○○と●●○が大半  
を占める。

一類連体形は●●●が多いが●●○もあり、二類は●○○優勢  
だが●●○を示す施譜も多い。一類・二類とも●●○という同じ

施譜が行われるわけで、●●○を示す胡麻があった場合には、語  
の所属がわからないことになる。しかし、この現象を、二類の一  
類化傾向が現れたものと考えるべきではなからう。

史的アクセントを導入して考えると、一類連体形は拍数にかか  
わらず、古くから高平型であった。近松丸本に現れる下降型は、  
アクセント型として認定すべきものではない。連体形のアクセ  
ントが●●●と●●○に揺れるのではなく、●●○は、連体形のあ  
と休止して、次の名詞は新たに語り出すなどの休止による自然下  
降が現れたもので、語る際の音楽的要請が施譜面に及んだものと  
思う。終止形も、●●○はアクセント型ではなく、すでに連体形  
同様●●●のアクセントに変化していると考ええる。『平家』の推  
定アクセントで、終止形に●●●と●●○が並記されているのは  
(9)、近松丸本の●●○は異なるのである。『平家』の場合は、曲  
節によってアクセントの反映する時代が異なるために、古い時代  
のアクセント型●●○を推定アクセントとして示しているのであ  
ろう。

一方、二類は●○○が●●●の約二倍あり、●●○は●○○の  
変容と考えられる。この類のうち、特に多用される「頼む」「残  
る」「思ふ」などは、●○○で現行義太夫節のなかに継承されて  
おり、復曲時にも聞かせどころでは●○○の節付けがされている<sup>(10)</sup>。  
義太夫伝承アクセントが●○○であるわけで、義太夫節成立時の  
アクセントは●○○であったと推定してよいだろう。

よって、一類のアクセントは●●●、二類のアクセントは●○○  
○に推定される。

なお、二類には「たゞく楓」(タニセウ)「たのむは」(膏ニセウ)「ぐどく」(万ニセウ)「ぐどくも」(氷ニセウ)のように高が一拍下って●○○↓●●○になっている例がある。語り出しのために一拍目を低く始めたもので、「節訛り」として語られたものが施譜に及んだのであろう。

三類は語例も少なく、所属も二類との揺れがみられるものもあるので、一語ずつ検討する。

「遊ぶ」は一類であり、『名義抄』『御巫』『袖中抄』『平家』には、一類のアクセント例がみられる。しかし、近松丸本では、連体形「あそぶ野雁」(薩四四ウ)、連用形に「遊びに」(冥十五ウ)があり、三類同様の低起式アクセントをもっていたとみられる。終止形・連体形が、低起式無核に変化した現代京都・大阪と同じアクセントをもっていたことになる。近世期資料の『平家』より新しいアクセントを反映するのであろう。

「隠す」は連体形「かくすこと」(万六オ)「かくすこと」(紅四オ)「かくすなげき」(淀三三オ)の三例ある。前二例は低起式を反映するが、最後の例は●●○を示し、一類・二類との弁別ができない。

三類は、鎌倉期あたりから二類への移行があり、特に「隠す」の個別の変化はかなり早く、「罷る・隠る・詣る」などは変化が遅かったという。<sup>(12)</sup>三類○○○から、低起式多数形の二類○○○に変化したのち、近世までのアクセント体系変化により●○○へ変っていることである。「隠す」「平家」の例は、連体形●○○で、他の活用形も二類のアクセントを示している。しかし、二

類化したままであれば、現代までに●○○↓●●○へ類推変化しているはずだが、現代京都・大阪では○○●の三類としてのアクセントである。

近松丸本の「隠す」の他の活用形をみると、「かくさいで」(堀十一オ)「かくし」(堀十オ)「かくして」(小十七オ)等、低起式を示す施譜が多いものの、「かくしなき」(曾十五オ)「かくせば」(淀二二オ)と高起式を示す例もあり。完全に二類化した様相をみせる『平家』とは異なる。

「参る」は終止形「参る」(淀二二ウ)「まいると」(紅十九オ)、連体形「参る也」(絵十九オ)「参るにこそ」(薩十ウ)で、いずれも低起式を示す。

「参る」「罷る」は『平家』も低起式で、連用形○○○、終止形に古い型の○○○もみられる。これらは、鎌倉期あたりからの二類への移行が起らず、終止形・連用形など○○○の三類のアクセントを保ったのであろう。「隠す」を除いて、終止形・連用形は、比較的变化が遅かったようだが、連体形が二類化し、○○○↓○○○となり、さらに体系変化を起して、○○○↓○○○に変った語でも、二類化が起らず、低起式を保った活用形があった。そのため、●○○となった活用形が、低起式に類推変化を起し、現代のような三類になっていくのであろう。二・三拍動詞二類の連体形(終止形)がアクセント体系変化後、●○○になったものの、連用形や未然形一般に低起式が残っていて、近世期から現代までに、低起式に類推変化するのと同じ現象である。それが、三拍動詞三類の場合、少し早い時期から始まったのであろう。



三類は、二類との所屬が揺れているものもあるが、終止形・連体形は低起式アクセントを反映した施譜が行われており、高起式の一類・二類との弁別は容易である。しかし、アクセント型の推定となると、古いアクセントの○○●●であるのか、○●●●あるいは○○●●であるのかは断定しにくい。

低起式アクセントの名詞では、二拍四類+助詞・三拍六類と、二拍五類+助詞・三拍七類のそれぞれに、一拍目に下げ胡麻を一つ施すだけという同じ施譜が行われている。名詞は施譜例が多いので、これ以外の施譜状況から、前者を○●●●、後者を○●●○と認定したが、一拍目に下げ胡麻一つの施譜では、二拍目は高だが、三拍目は不明ということになる。用例の少ない動詞の場合、アクセント型認定はむずかしい。

#### 【二一五】三・四拍動詞

(一類) 生るる・進むる・止むる・忘るる・教ゆる・浮ぶる・比ぶる

(二類) 清める・溢るる・尋ぬる・流るる・離るる・乱るる・求むる・別るる・答ふる

(三類) 隠るる・支ゆる

一類終止形は「生るべき」(調二九〇四)の一例のみ。三拍の古い語形に、特殊形を作る「べき」が付いたもので、「ウマル」と高く平らに語ったあと、産み字で抑揚を付けるのであろうから、●●●を反映していると考ええる。

一類連体形は、「わする<sup>ハル</sup><sub>ハル</sub><sup>ハル</sup><sub>ハル</sub>」(堀二ウ四)が、高平型アクセントを映す例であるが、これは謡の曲節を取り入れている箇所で、

義太夫節独自の胡麻施譜とは施譜意識が異なるものとして扱う必要がある。義太夫節の施譜は、「わする<sup>ハル</sup><sub>ハル</sub><sup>ハル</sup><sub>ハル</sub>」(重二二〇八)「をしゆる手」(小三三二ウ一)「くらぶる斗也」(念十三三〇四)の三例が●●●○を示し、「と<sup>ハル</sup><sub>ハル</sub>むるが」(堀六ウ三)「うかふるのりの水」(薩四六ウ三)の二例が●●●○を示す。史的アクセントからは、●●●●であったはずだが、その変容の●●●○・●●●○で実際には語っていたものか。

二類終止形は、「もとむとて」(淀三十ウ四)の●●●○を除き、連体形に侵蝕された四拍の形で現れるが、活用は二段の例である。「こぼる<sup>ハル</sup><sub>ハル</sub>」(丹二三三〇三)「わかる<sup>ハル</sup><sub>ハル</sub>」(堀二八ウ一)の●●●○を示す二例と、「こぼる<sup>ハル</sup><sub>ハル</sub>ぞや」(紅十七ウ二)の●●●○を示す例のみ。後者は「フシ」の例なので、やや音楽的要素が強いのであろう。

連体形は一段化した例もあり、「きよめる<sup>ハル</sup><sub>ハル</sub>かなとこ」(水十三ウ六)「たづぬる袖」(絵三十ウ四)「はなる<sup>ハル</sup>子」(紅十七ウ二)等●●●○を示す施譜例が八例ある。他に●●●○→●●●○の「みだる<sup>ハル</sup>あめ」(生二三ウ六)、●●●○→●●●○「こぼる<sup>ハル</sup>道中」(山二ウ二)の変容例もある。

二類は、終止形・連体形とも●●●○アクセントを推定できよう。

三類は終止形例なし。連体形は「かくる<sup>ハル</sup>かや」(油三四ウ二)と「さ<sup>ハル</sup>ゆるも」(堀二九ウ三)がある。前者は二類へ移行した高起式の例だが、他の活用に「かくれしを」(重九ウ三)の低起例もあり、三拍三類「隠す」同様二類化したものと、低起式に戻りつ

〔表2〕

特殊	終止	連体	語		類
			一	二	
	●	○●	一	二	一・二拍
	●●	●●	一		二拍
	●●	○●	二		
		●●●	一		二・三拍
	●●○	●●○	二		
	●●●	●●●	一		三拍
	●●○	●○○	二		
	○××	○××	三		
	●●●	●●●	一		三・四拍
	●●○	●○○	二		
		○××	三		

つあるものが現れている。後者は、連用形も「さゝあ」（重六オ8）で所屬の揺れはない。

以上、類別が明らかな動詞の終止形・連体形のアクセントを概観した。〔表2〕に、類別と推定アクセントの関係をまとめた。

### 三 類別と胡麻施譜の揺れ

二でみた類別と胡麻施譜の関係をまとめると、次のような問題が指摘できる。

① 一類連体形など、史的にみて高平型アクセントであったと考えられるにもかかわらず、下降調○○・●●○・●●○○の語りを示す胡麻施譜がある。

② 三拍動詞の場合に、●○○・●●○○の両表記があることと、①のごとく一類に●●●・●●○○の両表記があることから、●●○○のみの施譜では所屬が明らかにできない。

③ 三拍以上の低起式アクセントを持つ語は、第一拍目に下げ胡麻が施されているだけでは無核か有核か判断できない。

④ 一・二拍二類動詞・二拍二類動詞では、義太夫死後の作品に●○を示す胡麻が偏在する。

⑤ 三拍、三・四拍動詞には、二類と三類との所屬が揺れているため、胡麻が低起・高起の両様ある。

⑥ 高平型アクセントが予想される一類動詞等に、一拍目のみ下げ胡麻が施される場合がある。

⑦ 三拍二類動詞に高が一拍、後ろにずれたと思われる施譜例がある。

①②については、それぞれの箇所述べた。活用語の体系性や、通時論的解釈を導入すれば、たとえば三拍一類・二類の●●○は、それぞれ●●●と、●○○の誤記だと考えることもできよう。しかし、胡麻章は完全なアクセントの記述のために施されたものではないので、誤記とするのはどうであろうか。

体言の類別による胡麻施譜状態については別稿に譲るが、体言で高平型は嫌われる型ではない。●●○も、近代京都では嫌われる型とされているが、現代大阪では、老年層には聞かれる型であり、現行義太夫節でも「娘」は●●○で語るなど、近世期大阪では、京都よりも型としての独立性は強かったと思う。しかし、体言でも●○○↓●●○、●●○↓●●○の施譜の揺れがある。これらの揺れを、体言の場合には両型共存、用言の場合は誤記として処すことはできない。

一類の連体形など高平型は、多数形である連用形のアクセントにひかれたのではないかと考えられる。しかし、連用形の方も、●●○と●●●とを示す例があり、断定はできない。

実際にはアクセント型の揺れも含まれるのではあるが、語際の音楽的要素の影響が、施譜面にも現れているというのが原因なのであろう。

③は、胡麻施譜の不完全性が原因である。

④は、低起式であるものを●○で示す場合が、義太夫死後の作品に、一・二拍動詞二類七例、二拍動詞二類六例と偏るわけだが、①の二拍動詞一類も、義太夫死後の作品に●○が二八例と偏っている。つまり、義太夫死後の作品には、語類によらず●○が偏ることになる。これは、動詞に限ることではない。作曲上の変化が、胡麻章の働きの変化などの、アクセント型とは関係のない、施譜体系の揺れを考える必要がある。

⑤は、語の所属の揺れであり、④とは全く異なる揺れである。

⑥⑦は、音声的変容で、高く始めるよりは一拍下げて語る方が

発音しやすいところからくるものである。十七世紀末大阪では、●●●・●●○とも、アクセント型として存在していたため、「節訛り」が施譜に現れた例とできよう。現行義太夫節では●●○↓●●●は、ごく普通に行われているが、●○○↓○○●●は、特別な場合を除き、厳しく戒められる。

### おわりに

以上、動詞終止形・連体形アクセントの推定を通して、近松淨瑠璃本をアクセント資料とする際の問題を中心に考察した。

胡麻施譜の揺れが、語類間の移行現象を反映すると考えられるような重大なものもあれば、類別の認定を困難にしているものもある。近世初期大阪アクセントを体系的に扱えたり、京都方言との相違を考えたりするにはかなり有効であるが、一語一語のアクセント認定には、不完全なものもある。楽譜をアクセント史資料として扱う時の共通の問題ではあるが、十分な注意が必要である。また、近松丸本で、義太夫生前と死後との譜に相違がみられる点については、音楽的な面を考察するうえでも問題になろう。

### 参考文献

- 望月郁子『類聚名義抄四重声点付和訓集成』（昭和四九年三月 笠間書院）  
秋永一枝『古今集声点本の研究索引篇』（昭和四九年三月 校倉書房）  
秋永一枝・後藤祥子『袖中抄声点付施集索引』（昭和六二年十月 アクセント史資料索引六号）

秋永一枝『顯昭散木集注』<sup>声点注記資料ならびに声点付語彙索引</sup>（昭和五九年十二月同三号）

上野和昭『御巫本日本書紀私記』<sup>声点付和訓索引</sup>（昭和五九年四月同二号）

金田一春彦『四座講式の研究』（昭和三九年三月 三省堂）

奥村三雄『平家正節語彙索引』（昭和五八年二月 大学堂書店）

注(1) 坂本清恵『近松浄瑠璃譜本に反映した十七世紀末大阪ア

クセント』（『国語学』135 昭和五八年十二月）

(2) 奥村三雄『平曲譜本の研究』（昭和五六年五月 桜楓社）  
三六三頁

(3) 秋永一枝『古今集声点本における一・二拍動詞のアクセント——古今集動詞のアクセント上——』（『国文学研究』97 平成元年三月）

(4) 「浄瑠璃訛り解」（『浄瑠璃雑誌』26 明治三六年一月）

(5) 坂本清恵「語りの伝承——義太夫節のアクセントについて——」（『歌舞伎研究と批評』3 平成元年七月）

(6) 秋永一枝「アクセント概説——史的变化と方言分布——」（『講座方言学』1 昭和六一年五月）

(7) 佐藤栄作編「龍神アクセント」（録音・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作）（『アクセント史関係方言録音資料』平成

元年三月 アクセント史資料研究会）の注による。

(8) 佐藤栄作編「高知アクセント」（録音・秋永・上野）、「徳島アクセント」（録音・上野）、「龍神アクセント」（録音・秋永・上野・佐藤）、「田辺アクセント」（録音・佐藤・秋永・上野）（注(7)に同じ）および注(6)による。また、

金田一春彦「近畿中央部のアクセント覚え書き」（『近畿方言双書』昭和三十年四月を『日本語方言の研究』昭和五二年八月に再録）によると三拍二類の●○○より、二・三拍二類の○○○の方が使用する地方が狭いとある。

(9) 注(2)に同じ

(10) 注(5)に同じ

(11) 桜井茂治『中世京都アクセントの史的研究』（昭和五九年二月 桜楓社）一二五四頁

(12) 秋永一枝「古今集声点本における多拍語動詞のアクセント——古今集動詞のアクセント承前——」（『国文学研究』98 平成元年六月）

(13) 注(12)に同じ

(14) 服部四郎「国語諸方言のアクセント概観(三)」(『方言』1の4 昭和六年十二月)

(15) 金田一春彦「国語のアクセントの時代的変遷」（『国語と国文学』37の10 昭和三五年十月）